

協働による相乗効果を生んだ 新しいパークマネジメント

生物多様性の確保や地域コミュニティの形成など、公園に求められるニーズが多様化しています。そして、そのニーズを実現するには多くの人たちの協力が必要です。近隣の人たちを中心にしたボランティアという形のサポートが欠かせないでしょう。

こうしたボランティアと連携し、公園を管理・運営する取り組みが全国で広がっています。豊かな里山が広がる東京都立野山北・六道山公園（武蔵村山市・瑞穂町）も、ボランティアと市民団体の都民協働による公園管理が行われている公園のひとつです。

狭山丘陵の南西部に位置し、面積は160ヘクタールと東京ドーム34個分の広さを持つ都立公園最大規模の同公園。この公園を含めた4公園を造園会社やコンサルタント会社、NPOという5団体で構成さ

れた「西武・狭山丘陵パートナーズ」が指定管理者として、それぞれの強みを生かした公園管理を行っています。

同公園が取り入れている手法が「新たな協働型パークマネジメント」です。この手法について西武・狭山丘陵パートナーズの佐藤留美さんは、

「関係者間の合意形成、協働事業がスムーズに進むように、『公園は都民が主役、管理者はサポーター』というモットーのもとで、課題の抽出やビジョンの作成段階から近隣の人たちやボランティアの人たちに積極的に協力してもらっています。こうした取り組みがボランティアの育成やモチベーションの向上につながっているのです」と説明します。

新たな協働型パークマネジメントの導入は、さまざまな波及効果を生み出しました。05年には976人だったボラ

ンティアの参加延べ人数は、08年には5343人と5倍以上に拡大。当初は60代以上に偏っていた世代構成も若年層の参加が増え、40、50代を中核に幅広い世代が活動するようになったのです。

ほかにも公園ボランティアの活動内容の多様化や里山環境の改善、利用者サービスの向上、そしてノウハウを身につけたボランティアが新しいボランティアを育てていく効果ももたらしました。

「主役はあくまでもボランティアのみなさんです。深く長く当公園の管理運営に携わってくれるボランティアとともに、永遠に持続する公園づくりを進めていきたい」と意気込みを語る佐藤さん。ボランティアと連携した新たな協働型のパークマネジメントの導入により、生物多様性の保全だけでなく、公園を拠点とした地域コミュニティの創出や健康増進などの効果が生まれています。



上/雑木林で自然環境調査を行う公園ボランティア
下/公園のシンボル・里山民家(いずれの写真も野山北・六道山公園)